

面白くない

芝居

中野
劇団

面白くない芝居

作・中野 守 (中野劇団)

登場人物

男 1

男 2

男 1 が男 2 の部屋へやって来た。

男 1 は席に座り、男 2 は珈琲お茶菓子を用意している。

男 1

悪いな突然。

男 2

いや。珈琲でいいか。

男 1

ああ。……今日、芝居を見に行ったんだ。

男 2

ほう。

男1

アマチュアの小さな劇団なんだが……。知り合いにその劇団に相
当入れ込んでる人がいてね、その劇団が面白い面白いと日頃から
聞かされていたものだから、一体どれほどのものかと、どうして
も見てみたくなってな。

男2

面白くなかったのだな。

男1

その通りだ。

男2

期待するからだ。

男1

いや、期待分を差し引いてもあれは酷い。それまで僕は劇団なん
て劇団四季か劇団エグザイルくらいしか知らなかったが、その劇
団の名前だけは生涯忘れないと思うね。

男2

……君にそこまで言わせるとは余程な内容だったのだな。それは
お気の毒に。

男1

そうなんだよ。どんな話だったかというのだな——

男2

——ちよっと待て。ちよっと待て。

男1

……何だ？

男2 君は今から僕に、君が見た面白くなかった芝居の話を聞かせよう

としているのか。

男1 会話の流れから推して知るべし、だろう。

男2 面白くないと言ったのは君だぞ。

男1 僕がこれからする話が面白くないとは言っていない。

男2 ……。ということは結果的には芝居は面白かったのか？

男1 芝居は面白くなかった。

男2 面白くなかったが、その中でもまだ面白かった部分をエスプレッ

ソにして話してくれると、そういう意味か？

男1 いや面白い要素は、なかった。

男2 全くなかったのか？

男1 全くなかった。強いて挙げるなら、出演者のひとりが珍しい苗字

だったのが少し印象に残ったくらいだ。

男2 どんな苗字だったんだね？

男1 残念ながら失念したよ。

男2 とにかく確実に面白くなかったわけだな。

男1 ああ。

男2 ここまで取り立てるものがない劇団があったのだという感情を僕と分ち合おうというわけだな。しかし、その劇団を教えてくれたその人は相当面白くないんだろうな。

男1 その人は面白い人なんだ。

男2 ……。それは「見ていて面白い人」という意味か？

男1 それは、人を笑わせる人の中には「笑わせる人」と「笑われる人」とがいて、その後者ではないのかという質問でいいのだろうか。だとすれば答えはノーだ。

男2 成程。その人は面白いことがわかる面白い人なのに、その人が面白いと思ったものを君は全く面白いと思わなかったのだな。そのパラドックス――

男1 芝居の話をしていいだろうか。

男2 話したまえ。……どんな物語だったのだ。

男 1

いや物語と呼べる物語はなかった。九十分の間、一瞬たりとも芝居に入り込むことができないまま、終演した。……二千五百円もの金と大切な休日をどぶに捨てたよ。

男 2

悔しい限りだな。

男 1

あれを芸術というのであろうか。

男 2

君の話聞く限り、それは芸術だ。

男 1

しかしなら一層のこともっと振り切れたものを見せてくれればよ

かった。

男 2

そこで媚びないから芸術家なんだよ。誤解を恐れずに言えば、彼らは見る者を楽しませないことを目的に作品を作っているに違いない。当然のことながらつまらないものをつまらないと言うのは観客の自由だ。何故途中で席を立たなかったのだね。

珈琲を運んで来る男 2。

男1

君は小劇場というものに足を運んだことがないからそんな風に言えるのだ。席を立てるような空気じゃないんだ。全く、最後の最後まで不愉快であった。いっそ終わりまで眠ってしまいたかったが、時々意味不明の大音量の効果音が流れるせいでそれも叶わなかった。何かの実験台にされているのかと思ったよ。抗議の意味でクライマックスの真っ最中にスタンディングオベーションをしてやろうかと悩んだ程だ。

男2

さもしい男だな君は。そんなことをしたところで君の評価を下げるだけだ。

男1

残念ながらそのクライマックスが何処かもわからずに芝居が終わってしまった。芝居が終わると僕はそそくさと席を離れ、劇場の三軒隣に酒屋を見つけ、ワンカップを買って店の前で一息に飲み干した。

男2

それほどまでに腹の立つ内容だったのか。

男1

いや、途中からは店で飲み干すという行為が面白く思えてやって

しまった。飲み終えたらすっかり自分が今やらかしたことの面白さにほだされてしまったよ。そして、もう一度店内をぐるりと回り、ソフトさきいかを三袋も買ってしまった。

男2

よくわからないが、その時点で怒りは収まっていたのか。

男1

そういうことになる。

男2

しかし君がここへ来たときはかつて見たことがないほどの怒りを感じているようにみえたぞ。

男1

それは僕がこうして今した話がより君に伝わるように、まあ演出だ。

男2

そうか。では怒りはすっかり覚めてしまっていたのか。

男1

ああ。そして君に会う口実が出来たことをその劇団に感謝している程だ。

男2

成程、無駄ではなかったわけだな。(立ち上がり) そのさきいかと引換に冷えてないビールを出してやろう。

男1

いたたくとしよう。

面白くない芝居 2017.9.28

終わり。